

笹川平和財団 2022 年度第 4 回現代中東若手研究会 発表サマリー

日時：2023 年 3 月 14 日（火）16:00～ 18:00

報告者：吉井紀子（大阪青山大学健康科学部看護学科）

タイトル：長期化するシリア避難民の困難と受け入れ国ヨルダンの政策の狭間で翻弄されるシリア難民とヨルダン市民の現状

ヨルダン・ハシミテ王国は人口 1010 万人の半数以上をパレスチナなどからの難民が占める高中所得国である。2011 年、シリア内戦により 67 万人のシリア難民がヨルダンに流入した。2015 年の短期ボランティア支援活動から、彼らの困難な生活とヨルダン側の支援政策の課題について、ある訪問家庭の事例を通して報告した。

現在、ヨルダンのシリア難民の 80%以上が難民キャンプから都市部へ移動し生活している。しかし、2015 年の都市部ではシリア難民への就労制限があり、無許可で建築業や飲食業に従事するが低賃金により食料の確保も難しく栄養状態も低下する家族もいた。難民の保健医療支援として保健省管轄の保健セクターでの無料診療が実施されていたが、2014 年撤廃となり有料化する。負担額は低額であったが、正確な情報が得られない難民は支援や保健医療へのアクセスがわからず、私立病院を受診し高額な治療費が支払えず中断、健康状態が悪化していた。また、都市部でのシリア難民の急激な増加と難民支援の長期化によって、ヨルダンの保健分野等への社会的経済的負担が増大し、内戦初期はヨルダン国民もシリア人への同情と支援を積極的に提供していたが、長期化に伴い国民感情にも変化が生じていた。その上、開発途上国であるヨルダンの経済基盤は脆弱で難民支援資金を国連や先進国の資金援助に依存しており、資金状況により難民政策が変化する。それが原因でシリア難民支援政策も突然変更しているが、これがシリア難民の健康を脅かし生活を混乱させ、さらにヨルダンの人々の生活や心理にも影響を及ぼし、シリア支援への不満が高まる要因になっていると思われた。シリア難民に対する持続的で一貫性のある支援と最新の情報を正確に提供するネットワークシステムの構築が課題であると考えます。

報告に対して参加者から多くの質問をいただいた。ヨルダンの難民支援の理由、難民に対する国民感情の変化、精神的ケアの状況などである。また、コメンテーターの今井宏平先生はトルコからご参加いただき、客観的データの活用へのご指摘とトルコでの難民支援の状況をふまえ、ヨルダンでのシリア難民の精神的ケア、反難民意識についてご質問をいただいた。ヨルダンからご参加下さった佐藤麻理絵先生からは 2015 年のシリアの戦闘状況とそれに関連したヨルダンでの過激派の治療拒否問題をご教示いただき、公的医療の限界や長期化する難民支援のニーズの変化についてご質問をいただいた。長期化により国民感情が変化しており、客観的ではなく感情論的な不満が増加していること、ヨルダンの医療従事者の湾岸諸国への頭脳流出問題やスティグマによって精神的ケアが十分に行えていないことを回答させていただいた。現代中東地域研究を専門とする参加者や先生方から、貴重なご意見と示唆に富むご質問をいただき、新しい視点や視野を広げる貴重な機会を得た。